



TITLE:

京大広報 No. 269

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 269. 京大広報 1984, 269: 475-480

ISSUE DATE:

1984-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209417>

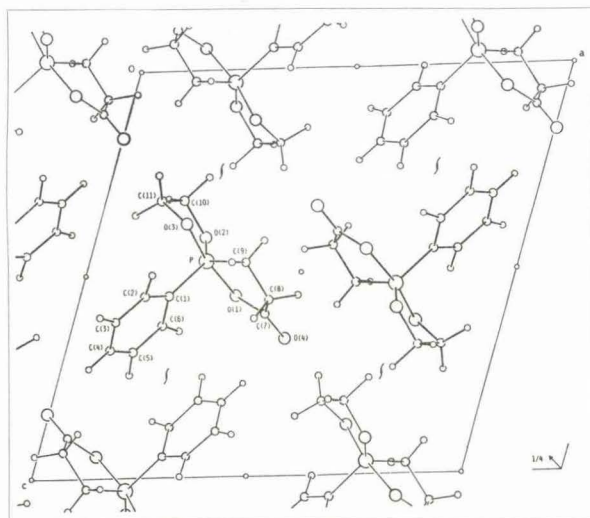
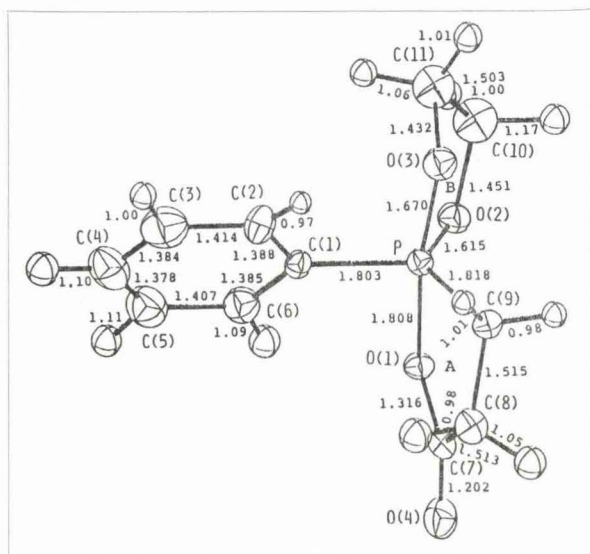
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 269

京都大学広報委員会



新しく発見された無触媒重合を行うモノマーの
構造(上)とその結晶のユニットセル(枠内)
を示す(下) ー関連記事本文 477 ページー

目次

昭和59年度入学者選抜学力試験 (第2次学力検査)の実施.....	476
昭和59年度医療技術短期大学部 入学試験の実施.....	476
カセサート大学との学術交流.....	476
医用高分子研究センター開所式.....	477
＜紹介＞ 工学部 合成化学教室.....	477
＜資料＞ 教育職員免許制度の改定 に関する国立大学協会の要望書.....	478
白浜海の家開設.....	479
日誌.....	479
＜随想＞ Q君のこと 名誉教授 阪倉篤義.....	480

＜大学の動き＞

昭和59年度入学者選抜学力試験 (第2次学力検査)の実施

昭和59年度入学試験(第2次学力検査)は、3月4日(日)と5日(月)の両日に実施された。各学部別の受験状況は次表のとおりである。

なお、合格者の発表は、3月19日(月)の午後、学部ごとに行われる予定である。

学 部	募 集 員 数	志 願 者 数	受 験 者 数	欠 席 率
文 学 部	200人	730人	711人	2.6%
教 育 学 部	50	134	132	1.5
法 学 部	350	737	726	1.5
経 済 学 部	210	820	799	2.6
理 学 部	281	970	953	1.8
医 学 部	120	377	360	4.5
薬 学 部	80	155	155	0
工 学 部	945	1,965	1,949	0.8
農 学 部	300	770	765	0.6
計	2,536	6,658	6,550	1.6

- (注) 1. 法学部及び理化学部の「志願者数」は、第1段階選抜合格者の数である。
2. 法学部と経済学部の「志願者数」と「受験者数」には、外国学校出身者のための選考試験志願者37名と14名とがそれぞれ含まれている。

昭和59年度医療技術短期大学部 入学試験の実施

医療技術短期大学部では、3月4日(日)と5日(月)の両日に昭和59年度の入学試験を実施した。受験状況は次表のとおりである。

なお、合格者の発表は3月16日(金)の午後に

行われる予定である。

学 科	募 集 員 数	志 願 者 数	受 験 者 数	欠 席 率
看 護 学 科	80人	174人	149人	14.4%
衛生技術学科	40	200	170	15.0
理学療法学科	20	125	101	19.2
作業療法学科	20	90	80	11.1
計	160	589	500	15.1

(医療技術短期大学部)

カセサート大学との学術交流

本学とタイ王国カセサート大学との学術交流に関する覚書が昭和59年2月28日に交換された。

この覚書は、昭和56年10月にカセサート大学クリスナ・チュティマ副学長が来学し学術交流協定締結の申し出があり、学内で検討が重ねられた結果交換されたものである。

京都大学とカセサート大学との 学術交流に関する一般的覚書

京都大学総長とカセサート大学学長は、両大学の教育及び研究の協力と交流を推進するために、ここに学術交流に関する覚書を作成する。

1. 両大学は、双方の学術交流を拡大、推進するために、特に次の諸活動を行うことを奨励する。
 - (1) 学術資料、刊行物及び情報の交換
 - (2) 教員及び研究者の交流
 - (3) 学生の交流
 - (4) 共同研究及び研究集会の実施
2. 前項の諸活動の具体化については、両大学間で緊密に連絡し、協議して実施に当たる。
3. この覚書を変更又は解消する場合は、両者の協議によるものとする。
4. この覚書は、日本語及び英語で作成され、両文書は等しく正文である。

昭和59年2月28日

京都大学総長

沢 田 敏 男

カセサート大学学長

チヨンラツク・

ブリーチャーノーン

<部局の動き>

医用高分子研究センター開所式

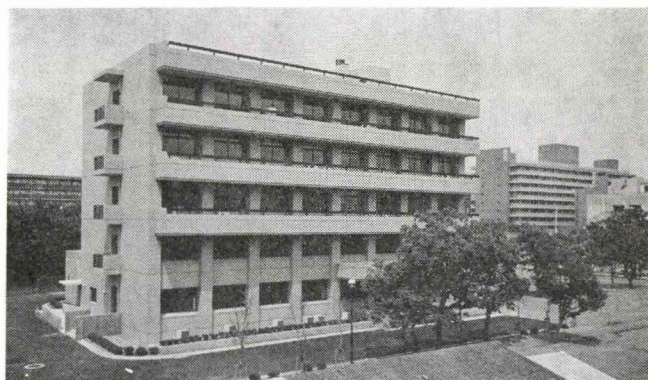
医用高分子研究センターは、昭和55年4月に設置され、昭和58年9月に病院西部構内（左京区聖護院川原町53）に5階建研究棟と1階建動物舎を含む建物の第一期新営工事（合計2,273㎡）が完了した。それを記念して昭和58年11月12日に第1回医用材料京都国際会議が本研究センター主催のもとに開かれた。これらの諸行事も一段落したので、昭和59年2月28日午前10時30分から本研究センターのセミナー室において、沢田敏男総長はじめ、学内外から多数の来賓の出席のもとに、開所式を挙行了した。

本研究センターは、「歯科材料応用研究領域」と「材料物性研究領域」の2研究領域から発足したが（本広報No. 212参照）、昭和56年4月に「材料合成研究領域」と「機能性高分子研究領域（客員）」の2研究領域及び昭和58年4月に「実験外科研究領域」の1研究領域が増設された。しかし、第一期工事によって建物が新営されるまでは、医学部、工学部、化学研究所、結核胸部疾患研究所などに間借りし、分散状態にて研究を続けていた。この不便な状況も第一期工事の完了に伴って解消された。

本研究センターの目的は、高分子をはじめ金属、セラミックスなどの材料

を医療に用いるための研究と、研究者の養成であり、具体的には、欠損あるいは病的生体組織・器官の置換と修復、医薬の放出制御、特殊手術用具などに関する研究を行う。そのためには、材料科学とか生物学などの基礎科学はもちろん、工学とか臨床医学などの応用科学の学識が不可欠であり、それらの研究者間の緊密な共同研究体制を確立する必要がある。本研究センターの開所は、まさに典型的な学際領域のための研究の場が、世界にさがけてこの京都大学に誕生することを意味し、その意義はきわめて大きい。

本研究センターの基本理念の実現には、「人工臓器研究領域」の設置が強く望まれるが、それも昭和59年度には達成される予定である。それに伴って第二期工事も着手され、本研究センターの研究活動にますます拍車がかかるものと期待される。



（医用高分子研究センター）

<紹介>

工学部 合成化学教室

合成化学科が工学部内で5番目の化学系学科として発足したのは、昭和35年である。当時、わが国化学工業の近代化の波にのって、合成樹脂、合成ゴム、合成繊維、合成洗剤等、画期的と思われる新製品が相次いで市場に登場した。これらの工業製品はしかしながら、その多くが外国から導入された技術による製品であった。このような欧米依存体質を根本から転換し、わが国独自の技術による化学工業を発展させる必要があった。このた

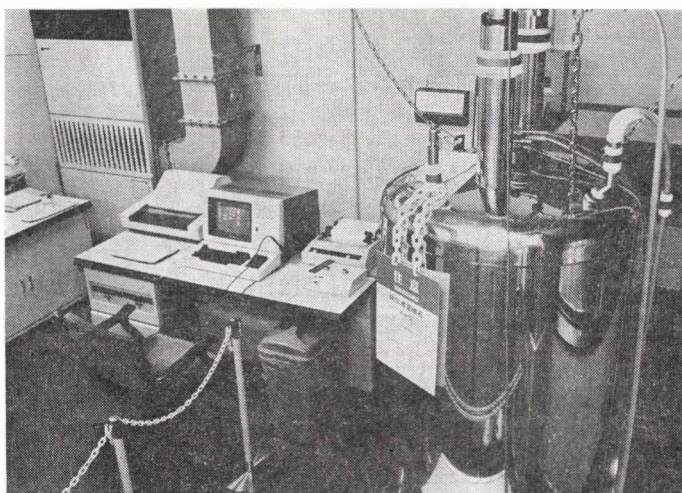
めには学術研究を基礎として、独創性の高い技術を生み出す基盤の育成が大切であると考えられた。この考えに沿って化学系4教室の協力のもとに、新しい合成化学の研究と次代の化学工業を創り出す研究者・技術者の養成、教育のため合成化学科が発足した。

このような学科創設の考えに沿い、世界に通用する研究活動を行うために、まず諸外国の研究者との積極的な交流推進を図ってきた。若手教官はそれぞれ海外の著名教授のグループで1年以上研究の推進力となって、帰国後研究室の高い研究水準を支える基盤となるとともに、日本の化学に対

する海外の高い声価の確立に寄与した。また諸外国の著名学者を多数招へいし、研究討論、学部・大学院における講義担当などを通して、研究上の大きな刺激と教育的成果を生んできた。現在は短期外国人訪問者は枚挙にいとまがなく、講演案内が掲示板を常時埋めている。更に最近では海外からの留学や研究者等の来訪もあって、国際交流が活発である。また国際学会における特別講演依頼も数多い。

現在の学科の研究分野は、有機合成化学、生物有機化学、物理有機化学、高分子合成化学などの領域で、有機化学にウエートを置く特徴的な構成となっている。研究内容は、新反応・新しい方法論を用いた有用物質生産のための有機合成反応の開発、生命現象の仕組みの解明と生物の持つ機能そのものの人工的な合成とその工業への応用、エネルギー・資源問題に寄与する新物質・機能材料の開発などである。具体的な研究テーマとしては、高歪化合物による太陽光の化学エネルギーとしての貯蔵、一重項酸素・金属-酸素錯体など光と酸素のかかわる生命現象の解明と利用、無触媒重合による高分子の合成（表紙図参照）、新しい機能性高分子の合成、電極での電子移動を用いた新反応の開発、分子認識を基礎とする生物機能の人工合成と海水からのウラン採取、各種遷移金属錯体触媒を用いた医薬・ビタミンなどの新規合成法などが挙げられる。

有機化学を基盤におく点で共通の認識に立つ長所が、反面他の領域に対する積極的な取り組みを抑えることにならぬよう、つねに教育面で配慮



400 MHz フーリエ変換高分解能核磁気共鳴装置

をしている。従って教育面では次々に新しい試みを取り入れ、広い視野をもつ学生の育成を目指している。また設備の充実にも力を入れ、とくに不安定化学種の分子構造の解析システムとして、400 MHz フーリエ変換高分解能核磁気共鳴装置（写真参照）、電子スピン共鳴装置が設置されているほか、FD、CI 付き高分解能質量分析装置などの大型設備を中心とした解析機器を有している。

石油・石炭に基づく素材提供を主とする化学工業を質的に高い工業に転換することは大きな課題であり、合成化学科はこれに対してできるだけ寄与したいと考えており、将来においては、新しい社会のニーズに合致した新機能をもつ超精密素材の開発、生命現象を基礎とし、これに新しい工学的フィロソフィーを盛り込んだ次世代科学技術の展開に積極的に取り組むつもりである。

（工学部）

＜資 料＞

教育職員免許制度の改定に関する 国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から、教育職員免許制度の改定に関し、以下のとおり関係方面に要望した旨報告があった。

昭和59年3月2日

国立大学協会会長

平 野 龍 一

要望書の提出について

過般教育職員養成審議会より出された答申（「教員の養成及び免許制度の改善について」58.11.22）について、当協会教員養成制度特別委員会で検討して参りましたが、この答申に基づく制度改定に当たっては、関係諸

方面の意向を十分に考慮するとともに行財政上の条件整備を図ることが必要との意見となりましたので、理事会の了承を得て、取り急ぎ文部当局にこの旨要望することとし、去る2月24日、事務局長が別紙要望書を携えて文部大臣以下各関係官にこれを提出いたしました。

以上、教育職員免許制度の改定に関し緊急に処置いたしましたので、同要望書の写を添えここにご報告いたします。

昭和59年2月22日

文部大臣
森 喜 朗 殿

国立大学協会会長
平 野 龍 一

教育職員免許制度の改定に関する要望書

このたびの教育職員免許制度の改定に当つては、教員養成の重要性に鑑み、関係諸方面の意向を十分に考慮して慎重に実施され、またその実効性を確保するため行財

政上の条件整備を図られ、とくに下記の諸点については特段の配慮をされるよう、ここに要望いたします。

記

1. 免許基準の改定にともなう措置

新免許基準の設定に当つては、その実施に必要な教官定員、施設設備等の整備充実を図られたい。また各大学の自主的努力が生かされるよう科目指定を過度に細分化することのないよう留意されたい。

2. 教育実習に関する措置

教育実習の単位の増加については、その有効な実施のために、実習校の確保、大学における事前事後の指導等のための条件整備について格段に留意されたい。

3. 大学院における教員養成の充実

免許状の種類の改定にともなつて、大学院における教員養成及び現職教育の重要性が増大するので、大学院の教職課程の充実及び一般大学・教育系大学の大学院の設置促進・整備充実について、とくに留意されたい。

白浜海の家の開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、白浜海の家を下記のとおり開設します。

この海の家は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、海に近く、夏は海水浴に最適のところです。

海の家のある理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、500種以上の海の生物を集めた水族館があり、有料で公開されています。

記

1. 名 称 京都大学白浜海の家
2. 所在地 和歌山県西牟婁郡白浜町
京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内

(交通機関)

国鉄紀勢線「白浜駅」下車、明光バス「明光バス本社前」行に乗車、終点で「臨海」行バスに乘換えて、「臨海」下車。

3. 開設期間 4月1日(日)から9月10日(月)まで。

4. 室 数 和室3室

5. 収容人員 35名

6. 所要経費 1人1泊使用料50円、ほかに食費等実費程度。

7. 申込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室(西部構内総合体育館内、電話学内2574)に照会してください。

(学生部)

日 誌

(1984年2月1日～2月29日)

- 2月7日 評議会
 - 〳 大学院審議会
 - 〳 保健衛生委員会
- 8日 体育指導センター管理運営委員会
- 13日 総長、大学院生協議会と会見
- 16日 タンザニア連合共和国 Jackson M. Makweta 教育大臣外4名来学、総長及び関係教官と懇談
- 17日 安全委員会
 - 〳 附属図書館商議会

- 21日 評議会
 - 〳 環境保全委員会
 - 〳 スウェーデン王国スウェーデン王立科学アカデミー Tord H. Ganelius 事務局長来学、総長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学
- 22日 国際交流委員会
- 24日 パナマ共和国 Panamá 大学 Ceferino Sánchez 総長来学、薬学部長と懇談
- 28日 医用高分子研究センター開所式
- 29日 附属図書館商議会

